

狼生きろ豚は死ね ● 幻影の城

石原慎太郎

狼生きろ豚は死ね

幻影の城

新潮社版



¥ 480

狼生きる豚は死ね・幻影の城

著者／石原慎太郎 発行者／佐藤亮一

昭和33年3月25日 印刷

昭和38年3月30日 発行

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町71／振替東京808／電話(341)7111-9

印刷所／株式会社二光印刷

製本所／新宿・加藤製本所

(落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします)

■ 目 次

狼生きろ豚は死ね 5 舞台写真

幻影の城 97 舞台写真

初演キャスト 199

装 幀 上 口 睦 人

狼生きろ豚は死ね
幻影の城

狼生きろ豚は死ね

登場人物

久の宮清二郎

松平帯刀

坂本竜馬

中岡慎太郎

平木圭吾

山井九兵衛

岩倉具視

後藤象二郎

高村折華

お藤

お時

女中

第一幕

第一場

幕開きの前、斬り合いの修羅場を象徴せる音楽

音楽が止んで、静寂

幕が上る

春、宵の口

京都

茶人折華の住居の離れ。坂本の隠れ家である

松平帯刀、中岡慎太郎

帯刀 おお、月が昇った。月の明りで遠くの花が白く煙って見える。こうしてみると都の花も今が盛りだ。

中岡 長らくお待ち頂いて恐縮です。

帶刀 いやいや、騒しい世の中にこのように静かな宵はあるものだな。茶人の住居とは結構な隠れ家だ。主人の折華は在宅かな。

中岡 はあ、後刻顔を見せましょう。

帶刀 では後程一服所望しようか、京の桜が今盛りならば、定めし江戸の花はもう散ったことだろう。

中岡 はあ、(間)どうも坂本の帰りが遅いようだ。何とかなければよいが。最近是新撰組や見廻り組の眼が前よりもずっと厳しくなつて来ましたからな。ここにおりましても危険が身にせまつているのが感じられます。

帶刀 それは、私の身とて同じことだ。同じ幕府の側にいるもの同士でも、なかなか理解し合にくいものだ。だが坂本さんにもしものことがあると。

中岡 まさかとは思いますが。

帶刀 お一人でか？

中岡 いえ、護衛はいます。しかし、それが。

帶刀 腕のたたぬ者なのかな。

清二郎、抜刀したまま入って来、中の声を聞き庭先に立つたままにいる。月の明りに血刀をすかして、懐紙にぬぐつてそっとさやへ収める。その後、暗闇に立ったきり。

中岡 いいえ、腕はたつのですが。

帶刀 はて？

中岡 ようするに信用がおけないのです。土佐の尊王派を弾圧している後藤象二郎の手に狙われ

ているといつてここへやって来たのですが、その理由がわれわれとは違うらしい。それがよくわからぬ。いや、わからなかつたのです。

帯刀 ほう。

中岡 今日昼前、土佐から彼の後を追つて来たという女が訪ねて来ました。問い質してみると、女に關しての刃傷で誰か人を殺めて脱藩したらしい。しかし、それだけのことで何故後藤がわざわざ彼を殺そうとするのか。

帯刀 なるほど。

中岡 身近に使っている人間について言うのも妙ですが、解せないところのある男です。同士が少くないので、頼つて来るものは迎えることにしているが、どうもあの男は、すねものと言うのでしょうか。表は穏和しいが、水底には悪意のある、沼のような男です。

帯刀 素姓は？

中岡 はつきりしております。御存知でしょうか、暗殺という噂があるが、半年前高知で何ものに闇打ちにされた土佐藩の家老、久の宮伊織の弟です。伊織は惜しい人物でした。彼さえいれば今の土佐藩をなんとかわれわれの味方に引き込むこともできたのでしように。伊織が死んで藩の実権を一人で握つた後藤は新体制へ動こうとする尊王派をことごとく弾圧し、高知の牢屋は今では下賤な盜賊や罪人たちの代りに、国を正しく起そうとする人間たちで溢れています。（間）いや、こう申している内に段々不安になつて来た。なんとしても帰りが遅いな。失礼して迎えに行つてみます。（立上り部屋の外で）平木、平木、用意をしろ、坂本を捜しに行く。

中岡、平木、出て行く氣配に清二郎、無表情のまま月の明りを眺めている。

帯刀、座敷で同じように月を眺める。

清二郎、顔を巡らして帯刀を見つめるが、やがて縁先へ歩
き出そうとした時、折華入って来る。

折華 いらっしゃいませ。坂本さんのお帰りが遅いようすな。松平様、珍しいものが手に入り
ました。ごらん下さいませ。

帯刀 何かな。

折華 光悦でございます。

帯刀 (さし出す) ほうこれは見事だ。

折華 この光悦にひとときわ風情を添える夜でございますな。おお、なにやら鳥の影が月をかすめ
ました。今時もう渡る雁もおりますまいに。

帯刀 千金の宵とはこのことを言うのだらうなあ。人間という奴は心にゆとりのなくなつた時、
妙に初めて花とか季節に気を配るようになる。秋から冬、冬からこの春にかけて、私には季節の
移り変りがいつもより急に口惜しいほど早いものに見え、なぜか心が焦つた。

折華 私はすっかり遁世の人間で深くは存じませぬが、みなさまのお仕事もわずらわしく大変な
ことでございますな。

帯刀 言われる通りわずらわしい。だがわずらわしくともその仕事が今の世に必要であれば、そ
れをやる人間もやはりいなくてはならぬ。

折華 (つぶやいて) 今の世に必要。

帯刀 世の中は変らなくてはならぬ。今はその時なのだ。われわれは間違ひなくそうした人間の
歴史の段階に立たされているのだ。わずらわしい仕事だが、しなくてはならぬ。(言いながら、手

にした茶碗を見つめ直す。見事なものだ。力強くて美しい。澄んだ色合い。大胆に思いきったはけ目だ。この手づくねの高台も見事だ。結構なものを拝見した——。

折華 松平様は今、人間のための歴史とおっしゃいましたな。時勢が変ること、時勢を変えることが人間にとって必要な、確かな歴史だと。その茶碗も人間の歴史です。小さいが確かな歴史です。たった一個の茶碗だが、なんと楽しい。力強い。そして大きい。私は、歴史というものをそうしたものではなく信じられない。人間の仕事というものをそうした結晶でしか信じられないような気がするのです。政治を、佐幕尊王を動かしている理想、大義名分というものは一体何なのではない。そうしたものには比べれば、この茶碗の方がはるかに確かに見える。確かにここにある。そして人間の手の内に残ってまいります。

帯刀 そうかもしれぬ。いや、そうなのだろう。しかし、私にはそうは言えぬ。言ってはならぬのだ。

折華 何故でございましょう？

帯刀 さあ、私の運命といえるかも知れぬ。私はあなたの言うその不確実な歴史に引き合わされた。それは私が生れてくる前から私のためにあったものだ。いやいや、私がそれを選んだのだと思う。私の焼かなければならぬ茶碗は、もつと粗雑で不確実なものだが、それを焼くことで私は多分、何よりも私という人間らしく生きられるのだろう。

清二郎、じつと帯刀をみつめながら庭先へ出て来る。

折華 おや、清二郎さん。坂本さんはどうしました。

清二郎 帰る途中、見廻り組に見咎められて斬り合いになり、坂本さんだけは、先へ逃れてもらいましたが。

折華 どうしたのだろう。

清二郎 何処かへ隠れていて、おっつけ戻られるでしょう。（縁先へ坐る）

折華 では。（奥へ立つ）

帯刀 あなたが伊織殿の弟御か。

清二郎 兄を御存知か。

帯刀 よく存じておる。

清二郎 あなたは、どなたです。

帯刀 松平帯刀。

清二郎 （驚き）幕府老中の

帯刀 そう。坂本さんは本当に戻られるかな。まさかあなたが斬ったのではあるまいな。

清二郎 （咎めて）なぜ。

帯刀 訳は先刻お聞きになって御承知の筈だ。

清二郎 なに。

帯刀 中岡さんが出られる前からその庭先においでだった。はは、よいではないか。（さりげなく）

剣は使い手と聞いたが、居合は念流かな。そうしている居ずまいにも隙すきがないな。

清二郎 （気おされながら）知っていないが、なぜ黙っておられた。

帯刀 あなたという人が知りたかったからかも知れぬ。

清二郎 なぜ。

帯刀 あなたはすねものだそうだが、まことかな。

清二郎 そうかも知れぬ。

帯刀 なぜすねておられる。

清二郎 (皮肉に) あなたのおっしゃる流儀で私も選んだからでしょう。

帯刀 なるほど、しかし兄上の衣鉢について、坂本さんと一緒に働くのなら、藩にあって家を継がれた方がいろいろ益も多かっただろうに。

清二郎 誤解されては困る。私は兄の衣鉢などついではない。そのためにここにいるのでもない。私は後藤に狙われている。だから彼とは仇敵同士の坂本さんの許へ身をよせているだけだ。

坂本の護衛をすることで、私も自分を守っているだけです。そして食うためにも。私は坂本という人を嫌いでも好きでもない。尊敬も軽蔑もしていない。あの人は私のただ雇い主だ。私は他人には余り関心がない。それにあの人たちがやっている政治という奴はもつとも嫌いだ。いや憎む。

帯刀 憎む、ほう何故かな。

清二郎 私に人間への関心をなくさせたものはその政治という奴だ。

帯刀 政治の何があなたをそのように傷つけたのだろう。

清二郎 逆におたずねするが、政治で傷つかぬ人間がいますか。

帯刀 なるほど。

清二郎 尤もあなたは傷つける側の人間か、いや、そうとしても同じことだ。政治という代物は、嘘と裏切りの刃で囲まれた檻のようなものだ。

帯刀 (微笑し、一人言に) なるほど、あなたが政事や人間についておっしゃることは間違いとは言えまい。だが、そうすればあなたは今に八方ふさがりになってしまう。一つ選んだらどうだ。

賭けて見たら。ひとつ眼をつむり信じて。

清二郎 賭ける？

帶刀 そう。いずれにしろ生きている限りは何かに向って眼をつむり、無理にもそれを信じこまねばならぬ。人が生きると言うことは大方、そうしたものだ。この土くれ、この光悦の茶碗でもいい。或いは政治という理想でもいい。

清二郎 (吐き出すように) 政治をか。

帶刀 ではこの土くれ、この光悦は。

清二郎 御免だ。

帶刀 いや勝手な人だ。

清二郎 なんとすと。

帶刀 いや、勝手というよりもむしろ女々しい。

清二郎 (刀に手をかけ) 女々しいと。

帶刀 そうではないか。以前あなたの身に何かが起きた。おそらく、政事に関わりある何かなのだろう。あなたはそれに傷つけられ、すねている。いいかな、私は断言出来るが、あなたを傷つけたものは政治に関わりある何かであっても、政治ではない。あなたはまだ政治がなんであるかを知りはしない。そして、あなたを今捉えているのは絶望などでは決してない。はは、ただのすねだ。すねるだけならば誰にでも出来よう。ひねくれて人生をただ強がつて生きて行くだけしか出来ぬ人間は臆病者か卑怯者だ。あなたはまだまだ知るまい。本当の絶望とはどういうものか。清二郎 若年と見てのあなどりはゆるさぬぞ。(刀をとり直すところへ庭先より坂本、中岡、平木、入って来る)